

第1章

研究の概要（総論）

「質の高い学び」の創造

～4つの視点を踏まえ、学びの連続性を生む各教科等の方策(2年次)～

概要

本校の1年次研究では、「質の高い学び」の実現を促す方策について、「『意欲』から『意味』への転換」「知識発見から知識構築のプロセス」「知識や最適解を他者と創るプロセス」「『学び方』を学ぶ自己調整的な学び」という4つの視点を手掛かりとし、各教科等の本質を捉えつつ研究を推進してきた。こうした実践研究からは、生徒の学びの質の高まりをみることができるようになってきた。

2年次では、前述の4つの視点を踏まえつつ、相互の関連やつながり、連続性に注目して、さらに研究を深めていく。

キーワード：連続性、教科等横断的な学び、非認知能力、資質・能力、協働

1. はじめに

1.1. 本校研究で目指す生徒像と1年次研究

本校では、学校の教育目標を「よく見、よく聞き、よく思い『自立をめざす生徒』」と掲げている。複雑化・多様化する社会の中で、一人一人が持続可能な社会の担い手として種々の事象に主体的に向き合い「自立」していくことを目指している。

学習指導要領解説の総則編には、「知・徳・体にわたる『生きる力』を子供たちに育むために『何のために学ぶのか』という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科等の目標及び内容を『知識及び技能』、『思考力、判断力、表現力等』、『学びに向かう力、人間性等』の三つの柱で再整理した」*1との記載がある。

本校の教育目標も、「知・徳・体」それぞれに具体化されており、それが以下である。

- ・常に知を探究し、創造する生徒(知)
- ・豊かな心を持ち、他を思いやる生徒(徳)
- ・強健な身体を養い、たくましく生きる生徒(体)

このうち、主として本校研究で目指すのは、知の側面である「常に知を探究し、創造する生徒」の育成である。

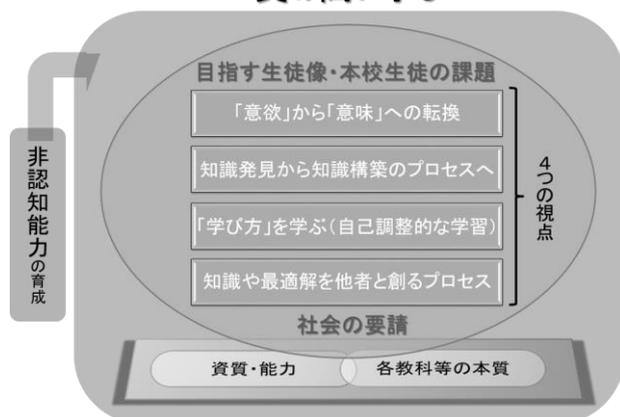
そのためには、いっそう「質の高い学び」の実現が求められると考え、今次研究の主題を「『質の高い学び』の創造」とした。このことについては、学習指導要領解説の総則編にも、「教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童の状況等に応じて、これらの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることが求められている」と示されている。

「質の高い学び」を創造すべく、本校では1年次の副題を「4つの視点を手掛かりとした各教科等の方策」として研究を進めてきた。以下の4つの視点を踏まえた授業づくりを行い学びの質を高めることを目指した。

- | |
|--|
| ア. 「意欲」から「意味」への転換
イ. 知識発見から知識構築のプロセスへ
ウ. 知識や最適解を他者と創るプロセス
エ. 「学び方」を学ぶ自己調整的な学び |
|--|

この4つの視点に加え、個々の学びを支える各教科等の見方・考え方や資質・能力、さらには「非認知能力」*2や前述の「目指す生徒像」等を総合的に捉え、「質の高い学び」をイメージしたものが以下の図である。

質の高い学び



本校研究における「質の高い学び」*3

1. 2. 各教科等から見られた成果や課題

1年次研究では、学びの質を高めるにあたって前述の4つの視点全てが重要であることや、4つの視点それぞれが独立したものでなく、複雑に関連し合っていることを想定しつつ、各教科等における実践では、とりわけ重要であると考えられる視点を重点化して研究を進めてきた。

1年次、各教科等が重点化した視点は以下である。

	意欲から意味へ	知識発見から知識構築のプロセスへ	知識や最適解を他者と創るプロセス	「学び方」を学ぶ自己調整的な学び
国語		○		○
社会		○	○	
数学			○	○
理科		○	○	
音楽	○			
美術	○	○		
保体			○	○
技術	○		○	
家庭			○	
英語		○		○

各教科等で重点化した視点

どの教科等においても、「4つの視点」を基軸として理論構築し、具体的な手立てを講じることで、生徒の学びの質が高まることを明らかとすることができた。*4

また、「4つの視点」に加えて、各教科の見方・考え方を踏まえながら各教科等の本質に迫ったり、教科の学びを支える基盤や基本となる資質・能力を捉え直したりしながら研究を進められたことも、1年次研究の大きな成

果といえる。

さらには、個々の学びを支えている非認知能力やその働きについて考え直すことで、学びに粘り強く取り組む姿勢や、自己調整的に学びを進めていくことが不可欠であることが再確認できたことも、成果の一つである。

その一方で、各教科等においては以下にまとめたような課題が明らかとなった。

教科	課題
社会	・既存の知識・技能を活用して学習課題を追究できるような単元構成の工夫 ・分野間のつながりをもたせ方
数学	・単元内における一単位時間同士のつながり ・「指導と評価の一体化」の在り方
理科	相関的あるいは融合的なカリキュラムを編成することによる教科等間のつながり
音楽	創作分野における表現と鑑賞のつながり
保体	コンタクトスポーツにおける単元の特性等を踏まえた協働の在り方
英語	学んだこと(コンテンツ)同士のつながりによるコンピテンシーの育成

各教科等における本校生徒の抱える課題(一部)

様々な課題が挙げられているように見えるが、共通項を探ると、どの教科等においても、諸要素におけるつながりをもたせることを課題としていることがわかる。単元同士のつながり、単元内の単位時間同士のつながり、他者とのつながり(協働)など、様々なつながりを踏まえてどのように学びをファシリテートするかが重要であると考えている。

また、前掲の「各教科等で重点化した視点」においても、とりわけ「知識発見から知識構築のプロセス」と「知識や最適解を他者と創るプロセス」に焦点を当てる教科等が多かった。換言すれば、知識を得ることから構築することへのつながりや、知識を創る際に生じる他者とのつながりを重視する教科等が多かったということである。

このことはつまり、様々なレベルにおいて、学びのつながり、すなわち「連続性」を重視するべきであるという考えがあるということに他ならない。

2. 学びの連続性

「連続性」の重視については前述の通りであるが、「連続性」について理論的視点から以下に述べる。

2. 1. 学びと実生活の連続性

学ぶことのリアリティや学びに向かう意欲とも関わるが、教室での学びが生徒の実生活とつながることの重要性はこれまでも言われている通りである。例えば、学習指導要領解説の総則編には『「何を学ぶか」という教育の内容を重視しつつ、生徒がその内容を既得の知識及び技能と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できる生きて働く知識となることを含め、その内容を学ぶことで生徒が『何ができるようになるか』を併せて重視する必要がある(後略)』^{*5}とあり、これはすなわち、学習によって得た知識・技能を、生徒自身の生き方や人生、日常の生活に転化させることを想定していると言える。

各教科等の視点では、例えば学習指導要領解説の国語編では「日常生活から社会生活へと活動の場を広げる中学生が、社会生活において必要な国語の特質について理解し、それを適切に使うことができるようにすることを示している。(中略)こうした『知識及び技能』を、社会生活における様々な場面で、主体的に活用できる、生きて働く『知識及び技能』として習得することが重要となる」^{*6}と示されている。

こうして現前の学びと実生活とを連続させることで、学びの質が高まり、ひいては知識及び技能が生きて働くコンピテンシーとなると考えられる。

2. 2. 学びにおける「縦」と「横」の連続性

教育課程編成の視点から連続性を捉える時、単元や題材等の「縦」のつながりと、教科等間の「横」のつながりを合わせて考える必要がある。

2. 2. 1. 学びの「縦」の連続性

「縦」の連続性というのは、つまり単元や題材のつながりのことである。このことについて、藤井千恵子(2018)は、「深い学びで重要なことは『いかに単元構成をするか』に重点をおくことである。そのためには、教育課程全体を俯瞰して、この学習がどのような位置づけになってい

るか、三つの資質・能力に基づいて何を子どもたちに身につけさせるかなどについて、それぞれの単元構成に反映させるようにする。そのために、一つは、縦のつながりである既習事項や生活経験を生かすために『学びの履歴』をもつことである」^{*7}としている。

各教科等において、資質・能力を高めるために意図をもって単元や題材を構成することが重要であるし、意図的に組んだ単元や題材によって確かな学びの履歴をもつことが、ひいては前述の「学びと実生活の連続性」にもつながっていくといえよう。

2. 2. 2. 学びの「横」の連続性

「横」の連続性というのは、主に教科等間のつながりのことである。本校の1年次研究においても、複数の教科から課題として挙げられている部分であることは前述の通りである。

学習指導要領の総則編にも「教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力(言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。以下同じ。)、問題発見・解決能力等)や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実すること」^{*8}とある。資質・能力を育むためには、この教科等横断的な視点は外すことができない。

また、藤井(2018)でも「各教科等の横のつながりを意識できるような教師の問いかけを工夫し、学びのつながりを子ども自身が気づくことができるようにする。意図的な単元構成と学校の教育計画における学びのつながりがあってこそ子ども自身が学びをつなげ、より深い学びへと誘うことが可能となる。」^{*9}と述べられている。

問いかけの工夫や単元構成への配慮、さらには教育計画の立案など、様々なレベルで「横」のつながりを持たせることが、学びの質を高め、生徒に深い学びを促すために重要であるといえよう。

2. 3. 他者との学びの連続性(つながり)

「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行うことについては、本校研究においても以前から注目し、他者との「対話」などの視点から、長く研究を進めているところであるが、ここで改めて他者との連続性について考えていきたい。

学習指導要領における「対話的学び」は、「子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める」ものと定義されている^{*10}。一方で，本校研究においては，他者との連続性（つながり）という視点において，さらに広く捉えたいと考える。

多田孝志（2018）は，学びにおける他者との対話の意義について「一人一人の子どもたちが多様な考え方，感じ方，体験を有していることを信じ，自信をもたせ，表現させ，それらを活用し，仲間とともに，新たな知の世界を拓いていかせることにある。（中略）ズレ，異との出あいによる，多様なものとのぶつかり合いから生ずる，混乱・混沌をへて，深い思考がもたらされ，新たな智慧や解決策を共創させていく。この体験が，探究心を高め，共創を基調とした良質な人間関係をも形成していく。」^{*11}としている。

他者との対話が深い思考をもたらすことはもちろんのこと，それがさらには探究心を高めることや，人間関係の形成（本校で研究しているところの「非認知能力」にまで広げて捉えてよいか）につながるということである。

2. 4. 指導と評価の連続性

学びの連続性を考える場合，生徒が自らの学びを見通したり振り返ったりする視点は極めて重要である。

国立教育政策研究所（2018）は，「児童生徒の学習状況を的確に捉え，教師が指導の改善を図るとともに，児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには，学習評価の在り方が極めて重要である」とし^{*12}，さらに「指導と評価の一体化を図るためには，児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し，教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り，学習や指導の改善に生かしていくことが大切である」としている^{*13}。

さらに『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善を通して各教科等における資質・能力を確実に育成する上で，学習評価は重要な役割を担っている」とも述べられており，ひいては指導と評価の連続性が，学びの質の高まりにつながるものであると改めて捉えている。

3. 個々の資質・能力同士の関連

これまで，様々な視点から学びの連続性について捉えてきた。これら学びの連続性の土台にあるのは「資質・能力」を育成するという目的である。

その一方で，この「資質・能力」というものも，複雑に関連し合うものであるということをおさえておかななくてはならない。

学習指導要領では，資質・能力を三本の柱で整理されている中，総則編において「知識及び技能の習得と，思考力，判断力，表現力等の育成，学びに向かう力，人間性等の涵養という，いわゆる資質・能力の三つの柱のバランスのとれた育成（中略）を重視していることに留意する必要がある。」^{*14}と述べられており，それぞれの調和を図ることが重要視されている。

さらに北尾倫彦（2020）は，「知識と思考は切り離して捉えられるものではなく，深く関連しているのである。（中略）子どもの学びを指導したり，評価する際には知識と思考を別物として扱うのではなく，相互に深くつながっていることを前提にして考えなくてはならない。

知識をどのように学べば思考に結びつくのか，どのような思考が知識を活かすのかということが今回改めて問われているのである。この立場から深い学びを導き出す術を工夫すべきではなからうか。このことを深い学びを捉える第一の観点として強く主張したい。（中略）

深い学びを捉えると同時に意欲，意識，態度，対話力といった観点を重視して子どもの学びの在り方を問い直すことが今回の改訂では求められているのではなからうか。知識や思考だけでなく，情意面や態度面も重視することを第二の観点として強調したい。」^{*15} というように，三つの柱相互の関連について述べている。

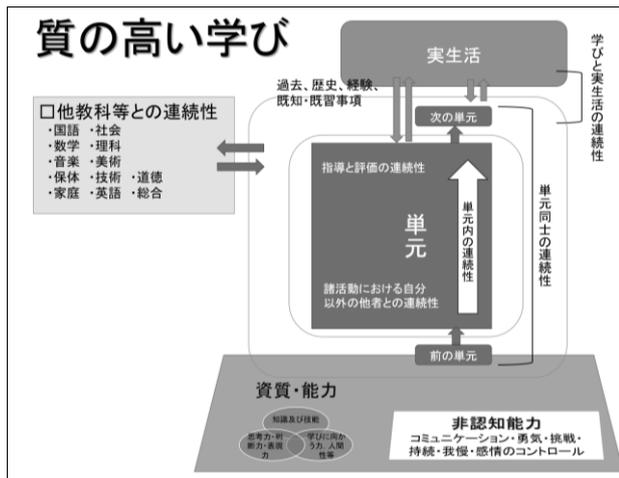
本校研究においても，資質・能力の三本柱を調和的に育成するのみならず，それぞれの諸要素を意図的に関連させながら，これまで述べてきたそれぞれの「連続性」に注目して研究を進めていく必要があると考える。

4. 研究主題と副題

これまで述べてきたように，学びの質を高めるためには，様々な視点における「連続性（つながり）」に着目することが重要であると考えた。

そうしたことを踏まえ，図式化したものが，以下の研究

構造図である。



本校2年次研究の「質の高い学び」構造図

この図に示したような視座から「質の高い学び」を創出するために、各教科等で具体的な実践を積み重ねることが肝要であると考えます。

そこで、本校の2年次研究では、これまでの研究主題に加え、新たに副主題を掲げることとした。

「質の高い学び」の創造

～4つの視点を踏まえ、学びの連続性を生む
各教科等の方策(2年次)～

(研究部 嶋田 善行)

注釈

- *1 文部科学省.「学習指導要領 解説」総則編.p3
- *2 「非認知能力」については、本校研究では基本的に中山芳一(2018)によっている。
- *3 この定義に即して構築した各教科等の具体的な理論と実践については、本校研究紀要(68)の総論に掲載している。
- *4 1年次研究の成果と課題についても、本校研究紀要(66)の総論に述べている。
- *5 文部科学省.「学習指導要領 解説」総則編.p35
- *6 文部科学省.「学習指導要領 解説」国語編.p12
- *7 教育調査研究所.「教育展望」(2018).p35
- *8 文部科学省.「学習指導要領 解説」総則編.p5
- *9 教育調査研究所.「教育展望」(2018).p35
- *10 文部科学省.「学習指導要領 解説」総則編.p78
- *11 教育調査研究所.「教育展望」(2018).pp28-29

- *12 国立教育政策研究所.「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」(2020).p2
- *13 国立教育政策研究所.「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」(2020).p4
- *14 文部科学省.「学習指導要領 解説」総則編.p81
- *15 北尾倫彦(2020).「深い学びの科学」.pp9-11

参考文献・論文

- (1)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(67)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(68)」
- (3)文部科学省.「学習指導要領 解説」.2017
- (4)文部科学省.「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」.2018
- (5)文部科学省教育課程政策課編.「中等教育資料(令和元年10月号)」.学事出版.2019
- (6)文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター.「学習評価の在り方ハンドブック」.令和元年6月
- (7)国立教育政策研究所編.「[国研ライブラリー]資質・能力 理論編」.東洋館出版社.2006
- (8)田中耕治.「パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」.ぎょうせい.2011
- (9)佐藤学.「質の高い学びを創る授業改革への挑戦」.東洋館出版社.2012
- (10)鈴木敏恵.「課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法」.教育出版.2013
- (11)溝上慎一.「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」.東信堂.2014
- (12)R.リチャート/M.チャーチ/K.モリソン.「子どもの思考が見える21のルーチン」.北大路書房.2015
- (13)梶田叡一.「アクティブ・ラーニングとは何か」.金子書房.2015
- (14)西岡加名恵/石井英真/田中耕治.「新しい教育評価入門 人を育てる評価のために」.有斐閣コンパクト.2015
- (15)岸学.「21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識、スキル、人間性、そしてメタ学習」.北大路書房.2016
- (16)奈須正裕.「『資質・能力』と学びのメカニズム」.東洋館出版社.2017
- (17)石井英真.「アクティブ・ラーニングを超える授業」.日本標準.2017

- (18)田村学.「深い学び」.東洋館出版社.2018
- (19)藤田由美子, 他.「ダイバーシティ時代の教育原理—多様性と新たなるつながりの地平へ」.学文社.2018
- (20)北村友人/佐藤真久/佐藤学.「SDGs 時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を」.学文社.2019
- (21)中山芳一.「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」.東京書籍.2018
- (22)国立教育政策研究所.「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」.東洋館出版社.2020
- (23)北尾倫彦.「『深い学び』の科学」.図書文化.2020